

石をのせた車

小川未明

青空文庫

あるところに、だれといつて頼るところのない、一人の少年がいました。

少年は、病気にかかって、いまは働くこともできなかつたのであります。

「これからさき、自分はどうしたらいいだろう。」と考へても、いい思案の浮かぶはずもなかつたのです。

いつそ死んでしまおうかしらんと考へながら、彼は、下を向いてとぼとぼと歩いてきました。いろいろな人たちが、その道の上を歩いていましたけれど、少年の目には、その人たちに心をとめてみる余裕もなかつたのであります。

やはり、下を向いて歩いていきますと、前を歩いているものが、なにか道に落としました。少年は、はつと思つて顔を上げますと、先にゆくのはおばあさんでありました。おばあさんは、自分になにか落としましたのも気づかずに、つえをついてゆきかかりましたから、少年は、うしろから、おばあさん呼び止めました、

「おばあさん、なにか落ちましたよ。」と、彼がいいますと、おばあさんは、はじめて気がついて、振り向きしました。そして、道の上に、自分の落としたものを見て、びっくりして、

「まあ、ありがとうございます。よく知らしてくださいました。これは、私の大事なものです。」と、拾い上げて、それから曲が

つた腰こしを伸ばして、少年しょうねんの方ほうを見て礼れいをいいました。

「おまえさんは、いくつにおなりです。」と、この人ひとのよいおばあさんは、話はなしが好すきとみえて少年しょうねん年ねんに問といました。

「十五になります。」と、少年しょうねん年ねんは答こたえました。

おばあさんは、しげしげと少年しょうねん年ねんの顔かおを見みていましたが、

「おまえさんは、どこかお悪わるいところはありますか。」とたずねました。

「どうも弱よわくて困こまります。体からださえ強つよければ働はたらくのですが……。」と、彼かれはうなだれて答こたえました。

「それなら、湯治とうじにゆきなさるといい。ここから十三里りばかり西にしの山奥やまおくに、それはいい湯ゆがあります。谷たには湯ゆの河原かわらになつてい

ます。二週間もいつてきなされば、おまえさんのその体は、生まれ変わったようにじょうぶになることは請け合いです。」

「それはほんとうですか？」と、少年は、生まれ変わったようにじょうぶになると聞いて、驚きと喜びとに飛び立つように思いました。

「ああ、それはほんとうだ。」と、おばあさんは答えました。そして、さつさとあちらへいつてしまいました。

少年は、おばあさんから、いいことを聞いたと思いました。

「しかし、その湯のあるところは、なんといいところだろう。」と、しばらくたつてから、少年は思い返しました。けれど、「なんでも、十三里ばかり西の山奥だということだから、西へ

いって、聞いたならばわからないこともあるまい。」と思ひました。

たとえ、そのように、いい温泉があつたにしても、すこしの金をも持たない少年には、その温泉へいって治療をすることは、容易なことではなかつたのであります。ただ、彼は自殺してしまふということだけは思ひ止まりました。

「そんないい温泉があつて、この体が達者になれるものなら、いま死んでしまつては、なんの役にもたたない。どうかして、その温泉へいって体を強くしてこなければならぬ。」と、少年は思ひました。

なにをやるにしても、病身であつて、思うように力が出ず、疲れていましたから、ほんとうに、どうしたら旅費がつくれるだ

ろうと考かんえながら、少しょうねん年は路みちを歩あるいていました。

少しょうねん年の頭あたまには、このばあい浮うかんだものは、乞食こじきをすると

いうことよりほかに、いい考かんえがなかつたのであります。

「そうだ、乞食こじきをしよう。」と、少しょうねん年は思おもいました。

まだ、乞食こじきというものを経けい験けんしたことのな**い**彼かれは、どこへい

つて、どうして知しらぬ人ひと々びとから銭ぜにをもらつたらいいだろうかと

思おもいました。

ほとんど途方とほうに暮くれてしまつて、少しょうねん年は、ある道みちの四よつ筋すじ

に分わかれたところに立たつていました。そこは、町まちを出でつくしてし

まつて、広ひろ々びろとした圃はたけの中なかになつていました。そして、どの道みち

を歩あるいていつても、その方ほうには、黒くろい森もりがあり、青あお々あおとした圃はたけ

があり、遠い地平線には、白い雲がただよって見えるのであり
ました。

「この四つ筋の道は、それぞれ町や村へゆくのであろうが、ど
んどころへゆくのだろう。」と、少年はあてもなく、左右前
後を見渡していたのであります。

そのとき、一人のおじいさんが、あちらからきかかりました。
少年はぼんやりとして見てみると、おじいさんは石につま
ずいて、げたの鼻緒を切ってしまった。

「ああ困ったことをした。」と、おじいさんはいつて、跣足にな
つて、鼻緒をたてようと思いました。なにぶんにも目が悪いので、
思うように鼻緒がたちませんでした。

少年しょうねんは、これを見みますと、さつそくおじいさんのそばへや
つてきて、

「おじいさん、私わたしがたててあげましょう。」と、しんせつにいい
ました。

「これは、これは、おまえさんがたててくださいますか、ありが
とうございます。」と、おじいさんは、たいそう喜よろこびました。

少年しょうねんは、おじいさんのげたの鼻緒はなおをたてていますと、あご
ひげの白しろいおじいさんは、つえによりかかってあたりを見みまわし
ていましたが、

「あすは、お寺てらのお開帳かいちようで、どんなにかこの辺へんは人通ひとどりの
多おほいことだろう。お天てん気きであつてくれればいいが。」といいまし

た。

「おじいさん、明日は、この道をそんなに人が通りますか。」と、
少年はききました。

「ああ、朝のうちから通るにちがいない。しかし、この四つ街道でよくみんなが道をまちがえるのだ。知らぬ人は困るだろう。」と、おじいさんはいきました。

「おじいさん、この四つ街道の行く先は、どこと、どこだか、私によく教えてください。」と、少年は頼みました。

おじいさんは、一つの道は、お寺のある町へゆくこと、一つの道は、遠いさびしい村へゆくこと、一つの道は海の方へゆくこと、一つの道は山の方へゆくことを、細かに、少年に向かってき

かせたのでありました。

少年しょうねんが、おじいさんのげたの鼻緒はなおをたててしまいましたと、

おじいさんは喜んで、町まちの方ほうへといつてしまいました。

少年しょうねんは、いいことを聞いたと思おもいました。自分じぶんは、明日あすこ

の四よつ街道かいどうのところところにすわつていよう。そして、道みちを迷まよつた人ひと

には、よく教おしえてやろう。自分じぶんは、どうしてもほかの乞食こじきがする

ように、通とおる人ひとごとごとに頭あたまを下さげてあわれみを乞こうことはできない

が、ただ黙だまつてすわつていたら、なかには銭ぜにをくれくれてゆくものも

ないともかぎらないと、考かんがえました。

あくる日ひ、少年しょうねんは朝あさはや早くから、そこにすわつていました。

いい天気てんきでありましたから、おじいさんのいったように、お寺てらの

お開帳かいちように出でかけかける人ひとが續つづきました。よく道みちを知しつてつてついる人ひとた
 ちは、さつさと少しょう年ねんのすわつてすいる前まえを通とおり過すぎて、道みちをま
 ちがわずにその方ほうへとゆきました。中なかには、老ろう人じんもありました。
 若わかい女おんなもありました。また親おやたちに連つれられてゆゆく子供こどもなどもあ
 りました。たまたまやさしおんなな女ひとの人が、少しょう年ねんのすわつて
 いる姿すがたを見みると、前まえに立たち止どまつて、懐ふところから財布さいふをとり出だして、
 銭ぜにを前まえに置おいていいつてくれくれました。そんなときは、少しょう年ねんは氣き
 恥はずかおもしい思おもいがして、穴あなの中なかへでも入はいりたいよような氣きがしまし
 たが、早はやく温おん泉せん場ばへいいつて、病びよう氣きをななおしてから働はたらくといいう
 ことを考かんえると、恥はずかわすしいのも忘わすれて、どんどんなつつらいことことも忍に
 耐たいをする勇ゆう氣きが起おこつたのです。

こうしておおぜいが連れ合つていった後から、一人できかかる男や、女がありました。その人々には、よく道がわからないとみえて、四つ街道にきてから、うろうろとしていました。

「お寺へおいでなさるのですか。」と、少年はいいました。
 「ああそうだ。」と、その人は答えました。

「そんなら、そちらの道をおいでなさい。」と、少年は教え
 ました。

中には、喜んで礼をいってゆくものもあれば、また銭を少年に与えてゆくものもありましたが、また中には、振り向きもせず、礼をいわずにいつてしまうものもありました。また、まれに、おおぜいでやってきて、みんなが道を知らないばあいなども

ありました。そんなとき、少年しょうねんがやはり道みちを教おしえてやると、

「感かん心しんな子供こどもだ。かわいそうな子供こどもだ。これにはなにか子細しさいが

あつて、乞食こじきをするのだろう。」などとうわさしあつて、みんなが銭ぜにをくれてゆくこともありました。

少年しょうねんは、その日は思おもひも寄よらぬたくさんな金かねを、人々ひとびとか

らもらいました。そして、日暮ひぐれに木賃宿きちんやどへ帰かえつてきて泊とまり

ました。彼かれは、ほかにいって泊とまるところがなかつたからです。

この木賃宿きちんやどには、べつに大人おとなの乞食こじきらがたくさん泊とまってい

ました。そして、彼かれらは、その日ひいくらもらつてきたかななどと、

たがいに話はなし合あつていました。

「俺おれは、一日いちにちじゆう人ひとの顔かおさえ見みれば、哀あわれつぽい声こえを出だせるだ

け絞^{しほ}り出^だして、頭^{あたま}を下げられるだけ低^{ひく}く下^さげて頼^{たの}んでみたが、これんばかりしかもらわなかつた。「と、あばた面^{づら}の乞食^{こじき}が銭^{ぜに}を算^{かぞ}えながらいっていました。すると一人^{ひとり}の脊^せの高^{たか}い、青^{あお}い顔^{かお}をした乞食^{こじき}が、

「俺^{おれ}は、一日^{いちにち}じゆうびつこのまねをして町^{まち}じゆうを歩^{ある}きまわつたが、やつと、こればかりしかもらわなかつた。」と、やはり銭^{ぜに}を掌^{てのひら}にのせて、見^みつめながら話^{はな}していました。

少^{しょう}年^{ねん}は、黙^{だま}つてそばに小^{ちい}さくなつて、みんなの話^{はなし}をきいていました。脊^せの高^{たか}いのが、

「やい、小僧^{こぞう}、おまえは、いくら今日^{きょう}もらつてきたか。」と、大^{おお}きな声^{こゑ}でふいに尋^{たず}ねました。

少年しょうねんは、正直しょうじきに、その日ひもらつてきた金かねの高たかを話はなしま

すと、みんなは、びつくりして目めをみはりました。

「小僧こぞう、だれに話はなしをつけて、俺おれの縄張なわばり内うちを荒あらしやあがつたか。

その金かねを、みんなここへ出だしてしまえ。」と、脊せの高たかいのは少しょう

年ねんをにらみつけていいました。

少年しょうねんは、もうすこし金かねがたまつたら、それを旅費りよひにして、

西にしの方ほうの温泉場おんせんばをさして、出でかけるつもりでいましたやさきで

ありましたから、死しんでもこの金かねは出だされないと思おもっていました。

けれど、あまり相手あいてのけんまくが怖おそろしいので、どうなることか

と震ふるえていました。

「まあ、堪かんにん忍にんしてやんなさい。なんととっても、まだ子供こどもだ。

それに病びようしん身みとみえて、あんなに顔かお色いろが悪いのだから。」と、あばた面づらの男おとこは、仲なかへ入はいつて、その場ばを円まるくおさめてくれました。少しょう年ねんは、心こころの中なかで、顔かおつきにも似にず心こころのやさしい乞食こじきだと思おもつて、あばた面づらの男おとこに感かん謝しゃしていました。

夜よ中なかのことでもあります。あばた面づらが少しょう年ねんを揺ゆすり起おこしました。そして、小ちいさい声こえで、

「おまえは、昨日きのうどこでもらつてきた。」とききました。少しょう年ねんは四よつ街道かいどうのところところにすわつていたこと、そして、開帳かいちようへゆく人々ひとびとに道みちを教おしえたことまで、すつかり話はなしをしました。

「なるほどな。」といつて、あばた面づらの乞食こじきはうなずきました。夜よが明あけると少しょう年ねんは、今日きょうも四よつ街道かいどうのところへすわつ

て、みんなに道を教えようかとおもいました。太陽が上がると、彼は、昨日のところにやってきました。すると、いつのまにか自分より早く、あばた面がそこにきてすわっているのです。

「昨夜、俺がおまえを助けてやったんだ。今日は、ほかをまわるか、休んで宿にいろ。そのかわり、俺がたくさんもらったら、分けまえをくれてやるから。」と、あばた面は、目をぎよろりと光らしていいました。少年は抵抗することもできなく、またほかを歩いて、どうしようという考えも起こらず、そのまましおと宿にもどってきました。

その日の暮れ方になると、外へ出歩いていた乞食らがみんなもどってきました。あばた面は、たいそう不機嫌な顔つきをして帰

つてくると、少年しょうねんに向むかっつていいました。

「おまえのいうことを聞きいて、ほんとうにしたばかりに大おおばかをみてしまった。だれひとり、道みちを聞きくものもなけりや、銭ぜにをくれるものも数かずえるほどしかなかった。分わけまえどころか、おまえから昨日きのうの分わけまえをもらわなけりや、埋うめ合あわせがつかない。それがいやなら、この宿やどからさつさと外そとへ出でてゆけ。」と、怖おそろしい目めつきをしてにらみました。

少年しょうねんは、ついにその宿やどから追おい出だされてしまいました。暗くらい夜路よみちをあてもなく歩あるいてゆきますと、いつしか山やまの方ほうへ入はいつてゆく道みちに出でたものとみえて、ある大おおきな坂さかにさしかかりました。ちようどこのとき、馬うまに車くるまを引ひかせ、石いしを積つんで坂さかを上のぼりかけ

ている男を見ました。どこからきたものか、人も馬も疲れていま
 した。少年は気の毒に思つて、坂を上るときに、その車の後
 を押してやりました。すると車の上から、小さな石ころが一つ転
 げ落ちました。なんの気なしに振り向いてみると、その石が不
 議にきらきらと光つていました。

「石が落ちた。」と、少年は、男に注意をしたけれど、男
 は黙つていました。返事をするのも物憂かつたようすであります。
 また、石ころ一つくらいどうでもいいと思つているようにも見え
 ました。少年は、坂の上まで押してやりました。しかし、男
 は下り坂にかかるのと礼もいわずに、さつさといつてしまいました。
 独り後に残された少年は、ぼんやりと立っていました。

なんとなく、光る石に気が引かされましたので、わざわざもどつてそれを拾つてみました。それは、黒っぽい岩のような石のかけらでありました。少年は、その夜は、ついにこの石を抱いたまま、坂の下の草原の中で野宿をしました。

夏の夜明け方のさわやかな風が、ほおの上を吹いて、少年は目をさましますと、うす青い空に、西の山々がくつきりと黒く浮かんで見えていました。そして、その一つの嶺の頂に、きらきらと星が光っていました。少年は、じつと星の光を見ていますうちに、熱い涙がしぜんと目の底にわいてきました。それは、産まれ変わったように体が強くなつて、ふたたびこの世の中に出て働くことのできる、長い、長い、未来の生活が空想された

からであります。

いうにいえない悲壮な感じが、このとき、少年の胸にわき上がりました。

「どんな、遠くへでも歩いていこう。」

少年は、おばあさんから聞いた温泉を思い出して心でいきました。

いよいよ夜が明けると太陽が笑いました。このとき、少年は、いままで大事にして握っていた石ころをつくづくとながめたのです。昨夜草原にねていて、空に輝いている星をながめたが、その星のかけらのように、美しく、紫色に光っている石でありました。

少年しょうねんは、その石いしを持って町まちへ出でました。そして、ある飾かざりり屋やの前まえを通とりかかりましたときに、その店みせさきにすわっていた主人しゅじん人にこの石いしを見みてもらいました。主人しゅじんは、眼鏡めがねをかけて、よく石いしを見みていましたが、

「これは珍めづらしい石いしだ。」といつて、どうか売うつてくれないかと頼たのみました。少年しょうねんは、石いしよりもつと自分じぶんの命いのちがたいせつだと、温泉おんせん行ゆきのことを思おもつて、主人しゅじんに美うつくしい紫むらさき色の石いしを売うつてやりました。

「こんな珍めづらしい石いしなら、いつでも買かいますから、また、ありましたら持もつてきてください。」と、飾かざりり屋やの主人しゅじんはいいました。少年しょうねんは、その店みせから出でて、往おうらい来来に立たちましたときに、ま

た、今夜も、あの坂の下に待っていて、もし、あの車がきたときに、後を押してやろうかなどと考えましたが、なんでも、いい機会というものは、二度あるものでない。お開帳の日だって、つぎの日には、あんなことがあつたと考ええると、旅費のできたのを幸いに、はやく目的地をさしてゆこうと決心したのであります。」

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「婦人之友」

1921（大正10）年9月

※表題は底本では、「石《いし》をのせた車《くるま》」となっています。

※初出時の表題は「石を載せた車」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月26日作成

2013年8月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

石をのせた車

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>